

(研究ノート)

大学院留学生は‘研究’をどのように捉えているのか — 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる質的研究 —

トンプソン (平野) 美恵子

キーワード

アカデミック・ジャパニーズ 基礎的知識 主体性 自律学習 キャリア形成

1. 研究の背景

グローバル時代における世界のボーダレス化は、人・モノ・カネの移動を活性化し、教育及びキャリア形成の場を世界中に広げていくことを可能にした。日本においても、学位取得を希望する留学生は増加傾向にある。それは、震災後の現在も同様であると言える。日本学生支援機構 (JASSO) による平成23年度留学生在籍状況調査結果を見ると、留学生全体の数は138,035人と前年比で2.8%減少したものの、大学院留学生数は39,749人と過去最多であった。2008年に文部科学省が発表した「留学生30万人計画」による大学のグローバル拠点化・留学生受け入れ整備・卒業後の社会への受け入れの推進など (文部科学省 2011) の後押しもあり、日本の高等教育機関は、今後欧米と並ぶ世界の教育拠点としての役割を果たしていくことが予想される。

では、大学院留学生に対する教育に際し、彼らのどのような力を前提とし、大学院教育においてどのような力の育成を目指すべきなのだろうか。大学院留学生を対象とした留学生教育は学部生と異なり、目標言語の学習以上に専門分野の修得が求められ (張・原田 2009)、言語能力や基礎的知識などは予め有していることが求められる。また、高等教育等で必要とされる学術的な日本語、アカデミック・ジャパニーズ (Academic Japanese ; 以下AJ)¹の駆使が必須とされる。学術的文脈で使用されるAJには、情報収集力・分析力・思考力・批判力・発信力などが含まれる (館岡 2002)。

しかしながら、母国で受けた教育状況が異なるため、基礎的知識の獲得及びAJの習得状況を十分考慮した上で、大学院留学生教育を整備していく必要があるだろう。母語で卒業論文を書いた経験がない (村岡 2008)、母国ではAJの学習機会がほとんどない (清水・トンプソン・張 2012) など、大学院入学以前の高等教育においては、母語・目標言語に関わらず、学術的文脈での言語使用が経験されていない可能性がある。さらに、張・原田 (2009) によれば、大学院留学生の中には、大学院生活を研究遂行の場ではなく、日本語力向上の場として位置づける者も少なくないという。つまり、学術的関心のない大学院留学生が多く存在するということになる。大学院で求められるAJの習得や基礎的知識の獲得がなされておらず、それらに関心がない中で大学院を志してきたとするならば、大学院留学生は、学位論文執筆に向けた研究をどのように捉えているのだろうか。彼らの研究

1

大学院留学生は‘研究’をどのように捉えているのか — 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる質的研究 —
に対する姿勢を把握することで、大学院留学生教育の何に重点を置けばよいかについて、一方向性を見出すことができると考える。そこで、本研究は、大学院留学生による研究に対する認識を探っていく。

2. 先行研究と研究目的

大学院留学生の認識をめぐる研究には、大学院留学生の大学院生活全般に対する認識を調査したもの、AJの学習に対する認識を調査したものがある。以下、順に見ていく。

大学院留学生の大学院生活に対する認識全般を調査したものには、岸田（2004）、二宮・中矢（2004）、園田（2007）、巴・郭（2011）がある。いずれの研究においても、経済的困難と日本語力の不足が挙げられていた。また、園田と巴・郭は、人間関係に対する困難を挙げ、日本人学生との人間関係構築や学外でのネットワーク形成を課題として指摘している。研究については、岸田と巴・郭は満足度が高いとしている一方、二宮・中矢と園田は不満や不安を挙げており、異なる結果が示されている。いずれも質問紙による量的調査であることから、インタビューなどの事例による質的調査を通じ、研究をめぐる認識をより微視的に追究することが望まれる。

大学院生活の中でもAJの学習に特化した認識を示したものに、トンプソン（2011）がある。トンプソンは、大学院修士課程におけるAJ教育科目の受講学生を対象とし、AJの学習をどのように捉えていたかについて、アンケート調査の結果を報告した。分析の結果、言語形式・論文の構造・研究の作法など、‘研究をどう見せるか’といった形式面に対する学習意欲は高いものの、思考の整理や活性化・情報収集や整理など、‘研究をどう掘り下げるか’といった内容面に対する価値づけは比較的低かったことが示された。AJにおける内容面の学習は修士論文執筆に欠かせないことは勿論、修了後の社会生活においても応用可能であると、トンプソンは指摘する。他方、AJ教育で提供すべき学習項目と大学院留学生のニーズとの不一致を克服するためには、そもそもなぜ大学院留学生は進学を決め、どのような認識の下研究を行なおうとしているのか、そして大学院生活におけるキャリア形成をどのように位置づけているのかを把握する必要があると論じている。

そこで、本研究は、大学院生活における修士論文執筆に至るまでの研究を、大学院留学生がどのように捉えているかを明らかにするため、インタビューで得たデータを質的に分析する。本研究を通じ、第一に、グローバル時代を担う高度人材の育成を可能にする大学院留学生教育への提案を行うこと、第二に、調査者が自分自身のAJ実践を内省し、その改善を図ることを目指す。

3. 研究方法

3-1. 対象者

本研究で対象としたのは、都内近郊の大学院に在籍する中国出身の大学院留学生3名である。いずれの対象者も、インタビュー調査実施時点で修士課程1年生であり、大学院に入学してから約4か月が経過していた。3名の属性を表1に示す。なお、母国での学歴にある専科大学は日本の短期大学に相当する。専科大学を含む高等教育機関への進学率は2006年時点で22%で、中国国内での進学は競争が厳しい（国立教育政策研究所 2009）。

表1の通り、本研究は、大学院入学以前の日本滞在歴が異なる3名を対象者として選出した。日本の大学院進学を目指すのは、1）日本語学校などの就学生（大学の日本語別科の場合は留学生）、2）志望大学等の研究生、3）国内専門学校や大学の留学生、に大別されると考えられる。本研究は、大学院入学以前の準備状況が異なる大学院留学生を対象とすることにより、大学院留学生に通底する研究に対する認識とそこから浮かび上がる教育上の課題を提示していく。

表1. 本研究で対象とする大学院留学生の属性

対象者 (仮名)	国籍	専攻	母国での学歴	母国での専攻	大学院入学前の 日本滞在歴
顔	中国	国際文化	専科大学(3年制)	日本語	留学生別科 1年
陳	中国	国際経営	本科大学(4年制) に2年生まで在籍	日本語	大学(編入) 2年
李	中国	国際経営	専科大学(3年制)	法律	日本語学校 2年 専門学校 2年 研究生 1年

3-2. インタビュー

対象者3名に対し、それぞれ1時間程度の半構造化インタビューを行なった。質問項目は、以下の通りである。研究をめぐる認識を想起させやすくするため、大学院入学前・現在・将来のように、時間軸に沿った形で項目を作成した。ここで言う‘研究’とは、1章で触れた情報収集力・分析力・思考力・批判力・発信力などのAJを修得していくプロセス、すなわち修士論文執筆に至る大学院生活全体と捉える。質問項目に従ってインタビューを進めたが、対象者の語りに応じて質問の順序が前後することもあった。

(質問項目)

- ① どうして大学院を受験しましたか。
- ② 大学院に入学する前の研究・大学院生活に対するイメージはどのようなものでしたか。
- ③ 大学院入学後、そのイメージは変わりましたか。
- ④ 研究・大学院生活はどうか。
- ⑤ 大学院での研究や生活に困難や不満はありますか。
- ⑥ 大学院の経験を今後どのように生かせると思いますか。
- ⑦ あなたにとって、大学院での研究とは何ですか。

なお、インタビュアーである調査者は、対象者が履修する一科目を担当した非常勤講師である。対象者に対し、インタビューで語られた内容は、評価に一切影響がないこと、インタビューデータは研究や教育上の目的にのみ使用されることを事前に伝え、ICレコーダーによるデータ収集の了承を得た。

3-3. 分析方法

本研究は、インタビューの録音データを文字化したものを、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)(木下 2007)によって分析した。M-GTAは、1960年代にストラウスとグレーザーによって考案された手法に木下が修正を加えたもので、対象とする現象のプロセス性の把握、データに根差した(grounded)深い解釈による理論生成、ひいては理論の実践への応用が可能である(木下 前掲)²。本研究は、大学院留学生の‘研究’に対する認識の形成過程を記述し、それをAJ教育に還元していくことを目指していることから、M-GTA分析の手法を援用することとした。以下、分析手順を示す。

- 1) 文字化したインタビューデータの‘研究に対する捉え方’に関連する箇所に着目

- 2) データから「具体例」を集め、類似するものごとに〈概念〉を生成
- 3) 概念と概念の関係を解釈し、概念を包括する《サブカテゴリー》、さらには《サブカテゴリー》を包括する【カテゴリー】を作成
- 4) 【カテゴリー】の関係を解釈し、大学院留学生の認識を「概念図」として図式化

次章では、「概念図」に基づき、結果をストーリーラインを述べながら示していく。

4. 結果と考察

大学院留学生3名による研究をめぐる認識を、M-GTAの手法で分析したところ、**【留学以前の研究に対する漠然とした動機づけ】**、**【暗中模索の研究生活】**、**【将来に対する肯定的な展望】**という3つのカテゴリーが生成された。分析を構造化した概念図を図1示す。以下、図1の概念図に従い、カテゴリーごとに具体例・概念・サブカテゴリーに触れながら、ストーリーラインを述べていく。なお、文中では、具体例に「」、概念に〈〉、サブカテゴリーに《》、カテゴリーに【】、を付して示す³。

4-1. 留学以前の研究に対する漠然とした動機づけ

大学院留学生らは、日本留学以前に受けた中国での教育について、「授業はつまらないと思ってました。(陳)」「中国では、日本語しか勉強しなかったんです。それに、1年目しかあまり学校に行かなくてよかったんです。(顔)」など、**〈受けてきた教育が物足りない〉**と感じている一方、「前は大学で、あまり勉強してないですから、自分の価値、あまりわからなかったです。(陳)」と、**〈学業に対して自信がない〉**自分をふり返った。これらのことから、**《学業に対する不完全燃焼》**感が、大学院進学を決意させる一動機だったことが窺える。また、「今、中国の大学院に入るのは厳しいです。(顔)」と、**〈母国での進学が難しい〉**ことを認識し、「今、仕事を探す人はだんだん少なくなって、大学院に行くとか公務員になるとか、公務員の試験に参加するとかそんなことしたり、今競争がとても厳しいです。(顔)」「外国とか、日本の修士があれば、就職に有利になる。(李)」など、母国での就職には学位取得が不可欠と考え、海外、特に日本で**〈学位が取得したい〉**という希望を持っていた。つまり、日本の大学院進学背景には、中国における**《学歴社会からの重圧》**があることが推察される。

一方、日本への大学院留学を決意した理由として、「日本は、やっぱり、あの一、先進国ですから、研究も中国より新しいことがわかりますから。(陳)」「中国で日本語とか日本の文化とか勉強しましたから、もっと深いこと、日本の大学院でもっとできると思ったんです。(顔)」など、**〈日本は研究が進んでいる〉**という漠然とした肯定的なイメージを抱いていた。そして、「日本の、あの一、子どもときは漫画、日本のイメージは強かったんですよ。あと、桜がきれいと思ったんですね。(李)」といった**〈日本文化が好き〉**だという日本に対する肯定的なイメージもあり、日本での研究という**《未知のものに対する憧れ》**が、日本への大学院留学を後押ししたことが窺える。

以上をまとめると、日本への大学院留学は、**《未知のものに対する憧れ》**という肯定的な動機による部分もあるものの、具体的なキャリアプランの下志望されたものではなく、母国での**《学業に対する不完全燃焼》**や**《学歴社会からの重圧》**により、必要性に迫られた選択だったことがわかる。これらの認識から、日本の大学院への**【留学以前の研究に対する漠然とした動機づけ】**が、カテゴリーとして生成された。

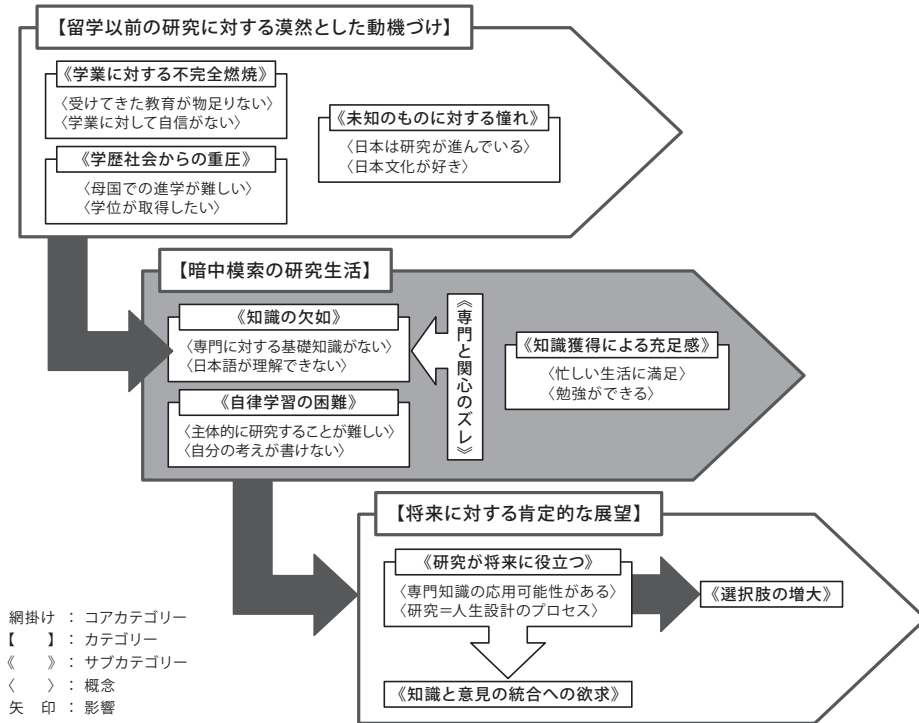


図1. 大学院留学生による研究の捉え方を示す概念図

4-2. 暗中模索の研究生活

では、日本の大学院進学を果たした彼らは、実際の研究生生活をどのように捉えているのだろうか。「学校の生活は、アルバイトもあるけど、毎日充実していると思います。(顔)」「忙しいですが、すごく身につけている感じします。(李)」など、〈忙しい生活に満足〉している。また「勉強は本当に、日本に来てから、勉強は自分のことと感じたんです。(陳)」と、〈勉強ができる〉という自信も得ており、日本への大学院留学における《知識獲得による充足感》が示されている。

一方、「この4ヶ月くらい、論文について書いて、やっぱり基礎知識がないとすごく大変、そういう感じだったんです。(李)」「中国では、日本語しか勉強しなかったんです。それに、1年目しかあまり学校に行かなくてよかったんです。(中略)でも今は、毎日勉強します。全部ゼロから読んだり、調べます。(顔)」と、〈専門に対する基礎知識がない〉ことで悩んだり、「授業で、先生が言ってること、あまりよくわかりません。(インタビューア:そういう時、どうするの?)辞書を引いたり、後で調べたり、あとは一、自分で理解します(笑い)。(陳)」など、〈日本語が理解できない〉ことで苦勞し、《知識の欠如》を感じている。こうした《知識の欠如》という問題は、「(自分の)関心あることが、なんとなく、できると思ってました。でも、(大学院に入るまでは、できるかどうか)あまりわからなかった。だから、入ってから、(テーマが)変わりました。(陳)」「修士論文では○○についてやりたかったんですね。でも、この大学には先生がいらないし、(中略)、(テーマを)▼▼▼▼に変えようかと今悩んでいるんです。(インタビューア:そのテーマについては、勉強したことがあるんですか)いえ、ないんです。(顔)」など、《専門と関心のズレ》によるところが大きいこと

5

が窺える。また、《知識の欠如》は、具体的な研究関心・計画なしに、【留学以前の研究に対する漠然とした動機づけ】により大学院へ進学したことにも起因すると推察される。さらに、「先生のなんか、あちらの方向とか、先生の指示に従うんじゃなくて、自分から、それが一番、それが今（難しいと）感じたこと。（李）」といった〈主体的に研究することが難しい〉と感じたり、「本の意見だけじゃなくて、自分の意見、ちゃんと書くんですよ。でも、うまくまとめないんです。（顔）」「考えあると思ったけど、書いてみると違って書けないんです。（李）」など、〈自分の考えが書けない〉ことに苦悩している。つまり、自らの力で考え、文章化していきながら研究を進めていくことに戸惑い、《自律学習の困難》を感じていることがわかる。

以上、実際の大学院における研究生活は、《知識獲得による充足感》を得ている一方、《専門と関心のズレ》や【留学以前の研究に対する漠然とした動機づけ】に起因される《知識の欠如》に対して困難を感じ、葛藤を抱えているのが窺えた。また、《自律学習の困難》も感じているが、特に有効な対策が見出せずにいるようであった。このことは、研究に関する大学院留学生の認識をめぐり、満足度の高かった岸田（2004）、巴・郭（2011）と、不満や不安の声があった二宮・中矢（2004）、園田（2007）で異なる結果が得られたことの内実を示していると言えるだろう。

これらの認識から、大学院生活における葛藤を示す【暗中模索の研究生活】が、カテゴリーとして生成された。

4-3. 将来に対する肯定的な展望

現在の大学院生活に困難を感じている一方、将来的には、「ここ（大学院）で得た知識が会社に入ったり、自分が会社を作った時に、役に立つだろうと。（陳）」と、〈専門知識の応用可能性〉があるという期待を抱き、「長い研究ができるようになれば、人生の計画もしっかりできるようになります。（李）」と、〈研究＝人生設計のプロセス〉と捉えていることから、【暗中模索の研究生活】を乗り越えれば、《研究が将来に役立つ》と認識していることが窺える。また、「やはり、自分の興味あることを深く調べて、ちゃんと自分を身につけて、えと、いろいろな、いろいろな資料を整理して、ちゃんと自分の考えも勿論出して、いい修士論文を書くこと（が目標）です。（顔）」と述べており、【暗中模索の研究生活】での《研究が将来に役立つ》ということが、《知識と意見の統合への欲求》を促していると推察される。

《研究が将来に役立つ》という認識が、大学院という学びの場に対する価値づけをより明確なものにしたことも窺える。「大学院の研究で、将来のチャンスを増やします。（陳）」「自分の大学に戻って教師になりたいんです。卒業したら、多分、できると思うんです。（顔）」など、大学院留学がもたらすキャリア形成上の《選択肢の増大》を、改めて認識していた。

このように、【暗中模索の研究生活】は苦しいものであるが、その模索に意義を見出しており、《研究が将来に役立つ》という認識の下、《知識と意見の統合への欲求》を抱き、キャリア形成における《選択肢の増大》を期待していることが窺えた。これらの認識から、【将来に対する肯定的な展望】がカテゴリーとして生成された。

5. 総合的考察

以上、大学院留学生の研究をめぐる認識から生成された概念図（図1）に基づき、分析結果としてストーリーラインを述べた。大学院留学生の語りから、留学以前は研究に対するイメージや展望は曖昧なもので、大学院留学が就職のための学位取得という必然性に迫られたものだったことが確認された。大学院で研究する現在、知識獲得による自己効力感と知識不足による嫌悪感の狭間で葛

藤を抱き、主体的に研究を進めていくことに困難を感じている一方、これらの苦勞がやがて結実し、キャリア形成における自己成長と選択肢の増大につながるという肯定的な展望を見出していた。本章では、本研究で得られた概念図による理論を実践に応用することを目指し、大学院留学生による葛藤が見られた【暗中模索の研究生生活】を中心に考察し、大学院留学生教育に対する提案を試みる。

第一に、将来のキャリアプランを確実なものにするために、自律学習の必要性を明示的に教示し、自身の学習をメタ的に捉える訓練をAJ教育に積極的に盛り込むことを提案したい。《知識の欠如》を克服するためには、例えばAJに含まれる能力の一つ、情報収集力を発動させ、主体的に取り組んでいく必要があるが、《自律学習の困難》がそれを妨げている可能性がある。対象者の出身国中国では、講義などを通じ、教員から受身的に知識を受容するスタイルが一般的であることに鑑みると、《知識獲得による充足感》は、学生自らの力で知識獲得したというよりは、教員から知識を‘与えてもらう’ことによるものと考えられる。情報収集力をはじめとするAJ運用能力は、受身的な知識の受容では育成されず、学習者自らによる目標設定、計画と遂行、結果の評価、というプロセスを含む自律学習が不可欠である（館岡 2002）。トンプソン（2011）は‘研究をどう掘り下げるか’をいかにAJ教育に盛り込むかについて保留したが、大学院留学生が【暗中模索の研究生生活】に葛藤を感じつつも、【将来に対する肯定的な展望】を実現可能なものにする捉えていることから、AJ教育に際し、学生が主体的かつメタ的に自身の学習を管理するシラバス・教室活動のデザインを積極的に追求することで、暗中の模索をより肯定的に捉え、克服すべき課題に向き合う姿勢を醸成することができると考える。

第二に、《専門と関心のズレ》を最小限にするために、研究計画と自身の関心がどう関連しているのかを十分に吟味する機会を設けることを提案する。張・原田（2009）などのように研究生に特化する、あるいは研究生教育（大学院入学予備教育）と大学院留学生教育の連結により、連続性あるプログラムを開発することもできるだろう。なぜ大学院に入るのか、なぜ研究をするのかに対する自問自答の蓄積が、研究目的の精緻化につながり、AJ運用能力の獲得、ひいてはキャリア形成に働きかける大学院留学を可能にすると考えられる。

6. 結語

本研究は、大学院に入学して間もない大学院留学生の認識を見た。研究の捉え方が、大学院生活を経て変容するのか、また、大学院生活を通じて得たAJ運用能力・研究力が大学院修了後どう活用され、意味づけられていくのかをさらに追究する必要がある。追跡調査による縦断的分析を今後の課題としたい。

注

1. AJは、学術目的で英語を学習するEnglish for Specific Purpose（略称ESP）の流れをくむものである。山本（2004）は、AJを、高等教育における学術分野に加え、卒業後の職業生活や社会生活で使用される高度な日本語、と定義している。つまり、AJは留学生の知的活動を長期的に支え、促進する媒介手段となりえるものである。
2. 木下（2007）は、データがインタビュアーとインタビュイーの社会的相互作用によって形成されることを重視し、インタビュアーである「研究する人間」が、なぜその研究をするのかを明確化することが肝要だと論じている。研究目的に示した通り、調査者は「研究する人間」として、対象者との社会的相互作用から得た理論を自身のAJ教育に応用し、そのあり方を再考することで、よりよい実践を模索することを目指した。
3. 具体例は、対象者による発話を忠実に切り取ったものである。一部補足が必要な場合は、発話中に（ ）で示し、また、どの対象者によるものかを「 」の最後にカッコで記した。

参考文献

- 岸田由美 (2004) 「理系大学院留学生の生活とニーズに関する事例研究ー金沢大学留学生生活実態調査の分析よりー」『金沢大学留学生センター紀要』7, pp. 45-58.
- 木下康仁 (2007) 『ライブ講義M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂
- 国立教育政策研究所 (2009) 「Ⅱ. 教科書制度と教育事情」『第3期科学技術基本計画のフォローアップ「理数教育部分」に係る調査研究』国立教育政策研究所
- 清水まさ子・トンプソン (平野) 美恵子・張瑜珊 (2012) 「日本語ノンネイティブ教師は自身の論文執筆経験と論文指導をどのように関連づけているのかー修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる視点提示型研究からー」『日本語教育国際研究大会名古屋2012予稿集 分冊1』p.35.
- 園田智子 (2007) 「大学院留学生の研究生活における困難度と関連要因」お茶の水女子大学大学院修士論文 (未公刊)
- 館岡洋子 (2002) 「日本語でのアカデミック・スキルの養成と自律的学習」『東海大学紀要 留学生教育センター』22, pp. 1-20.
- 張瑜珊・原田三千代 (2009) 「研究生のための『アカデミック日本語教室』の試みー協働で学ぶ研究計画書作成ー」『言語文化と日本語教育』(37), pp. 31-40.
- トンプソン (平野) 美恵子 (2011) 「大学院留学生は『アカデミック日本語』におけるプロセスライティングをどのように受け止めたかー学期末のアンケート調査を通じてー」『国際経営・文化研究』16 (1), pp.69-76.
- 二宮皓・中矢礼美 (2004) 「留学生調査にみるわが国の大学院受け入れ体制の現実と課題ー：大学院留学生調査と教員調査の自由記述分析を通してー」『広島大学留学生センター紀要』(14), pp.47-63.
- 日本学生支援機構 (2012) 「平成23年度外国人留学生在籍状況調査結果」
http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data11.html 2012年9月20日アクセス
- 巴芳・郭芳 (2011) 「大学院留学生の研究生活実態調査ー同志社大学社会学研究科を事例にー」『同志社大学教育開発センター年報』(2), pp.63-74.
- 村岡貴子 (2008) 「日本における大学院レベルの日本語学習者を対象としたアカデミック・ライティング教育とは」『言語文化共同研究プロジェクト2007アカデミック・ライティング研究Ⅱーより効果的な教育のために』pp.11-20.
- 文部科学省 (2011) 『『留学生30万人計画』進捗状況について (平成23年8月現在)』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/08/03/1324282_01.pdf 2012年9月20日アクセス
- 山本富美子 (2004) 「アカデミックジャパニーズに求められる能力とはー理論的・分析的・批判的思考法と語彙知識をめぐってー」『東京外国語大学留学生日本語センター移転記念シンポジウム 資料集 パネルディスカッション3』pp.98-103.

8

(受理 平成24年9月14日)